

〇 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっていました。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきれずに取り除いてください。

マーク例

①	
○	1
○	2
●	3
○	4
○	5

(3と解答する場合)

— 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

(1) 私は「社会の成熟度と個人の成熟度は反比例する」と確信している。

たとえば、現代においては多くの青少年が、しばしば三〇歳近くなるまで、親からの経済的支援を受けつつ、あるいは親と同居しながら、学生として生活している。基本的に学生時代とは、自己決定を免れるモラトリアム期間なのだから、その是非はともかくとして、経済的に自立するタイミングはそのぶん遅れる。経済的自立 \parallel 大人、と考えるなら、成熟の遅れの背景にはこうした事情も考えられる。

もつと抽象的な言い方をすれば、そもそも成熟社会とは、少々ハンディキャップがあっても普通に生きていく社会を意味する。未成熟さがハンディであるとしても、現代はそれがサバイバルにおいて不利にならない時代、ということになる。さらにIT業界やゲーム業界のように、ある種の未成熟さが積極的な価値を帯びる業界もある。あえて成熟するメリットがないとすれば、それを選択しない若者が増えるのは、むしろ当然のことだ。

また、日本の場合、「大人のイメージ」があまり良くない。イメージという点で言えば、「大人の男性」の代名詞が「オヤジ」、「大人の女性」のそれが「オバさん」であることも問題だ。いずれもはつきりと負のイメージであり、若者が「そうはなりたくないもの」の筆頭格であろう。逆に言えば、今の日本には「カッコ良い大人」の^(注)ロールモデルが乏しいのだ。

(2) 現実の若者はますます弱者化しつつある反面、イメージとしての若者の価値は依然として高い。むしろイメージに限定して言えば、「若い」は圧倒的に褒め言葉として用いられるし、女性に至っては「女子」という言葉の汎^(a)用性(中高年でも「女子会」や「美魔女」ブームのように、加齢を敵視する視点はますます広がりがつつあるように思われる。

ひとたびカルチャーに目を転ずれば、こちらは完全に「若者」の^(b)独擅場だ。マンガやアニメ、ゲームなどのオタク文化(クールジャパン!)は実質的に若者文化だし、ヒットチャートをセッケンするのはジャニーズとAK

B 関係者、映画にしても邦画のターゲットは実質的に若者だ。

すでにマス消費者としての若者層は有効なターゲットの座を高齢者層にあげわたしているにもかかわらず、依然として消費文化においては「若者偏重」が続いているのは、なかなか奇妙な風景である。

ここまで自明のことのように「大人」や「若者」と書いてきたが、それでは果たして「大人」とは何だろうか。⁽³⁾この問いはつまるところ、「成熟とは何か」という問いと重なる。

大人が第一にクリアすべき条件は「経済的自立」である。さらには「自分自身の言動に責任が取れること」でもある。これは「大人」にとつて、社会的な必要条件の最低ラインだ。

心理的条件としてはどんなものがありうるだろうか。僕がいつも念頭においている二つの条件は、「待てる」と「伝える」の二つのスキルだ。

待てるスキルとは、実現したい願望があるとして、その実現を待てるかどうかにかかわるもの。何かを「してほしい」あるいは「やめてほしい」のいずれもここに含まれる。

伝えるスキルとは、単なるコミュニケーション・スキルを意味しない。自分の感情を適切に伝えるスキル、というほどの意味だ。「受け取るスキル」と言わないのは、それが「伝える」の前提に含まれているためもある。伝えるスキルが高い人はほぼ例外なく受け取るスキルも高いのだが、逆は必ずしも成立しない。

心理学的には「アイデンティティ（自己同一性）」の確立こそが最優先ではないか、という異論もあるだろう。その概念の重要性を認めるのにやぶさかではないが、基準が曖昧な上にトートロジーになりやすい（成熟している人はアイデンティティが確立しており、逆もまた真、といった意味で）という問題もあり、ここでは深く立ち入らない。

精神科医・中井久夫は、精神的健康のしるしの一つとして「自分が世界の一部であると同時に世界の中心であると感じられること」を挙げている。かけがえのない固有の存在であると同時に、「ヒトの個体」という匿名性にも開かれた存在である、という認識の両立。こちらにも、ほぼ成熟の定義と読み替えてかまうまい。

一見矛盾するような、この二つの認識を調停すること。「世界の中心」意識が強すぎると、尊大であったり自己中心的であったり、あるいは「世界の中心であるにもかかわらず」という意識ゆえに自尊心が低下したりといった「病理」につながりやすい。いっぽう「世界の中心」意識に傾きすぎれば、他者への依存度が増して共依存的になったり自己のよりどころを失って抑うつ的になったりしやすくなる。

興味深いのは、こうした認識はある種の精神病においても見受けられることだ。統合失調症の「二重見当識」^(注4)などはこれにあたる。彼はモウソウ世界では「資産二〇兆円の東京都知事」である。にもかかわらず、看護師に頼まれて、病棟で配膳^{びんぜん}を手伝ったりする。知事のくせにおかしいではないか、と笑う者は、彼よりも「大人」とはいえない。これは統合失調症の症状と言うよりは、健康さや成熟度の指標とすら言いうるのではないか。

「世界の中心」であるにもかかわらず「世界の一部」という認識は、矛盾ではない。われわれの「いまここ」の認識そのものに、常にすでに、固有(中心)と普遍(一部)の双方が刻まれているということ。それを事後的に分解したときのみ、矛盾や齟齬^(b)が生じるのだ。

この認識から、「成熟」について再検討してみよう。

考えてみれば「待つ」と「伝える」にも同じ矛盾がある。ある異性が気になったとして、タイミングを「待つ」態度と、さりげなく好意を「伝える」態度とでは、どちらが大人の態度なのか。これは成熟よりも性格の問題なので、態度としては甲乙つけがたい。重要なことは、「待つ」と「伝える」にも、「中心」と「一部」の逆説がひそんでいることだ。

「待つ」ことは自己主張を控え、自分の欲望に待ったをかけること。つまり「一部」としての自分に徹することだ。いっぽう「伝える」ことは、自分の欲望を適切に解放すること。「中心」としての自分を尊重する態度だ。

さきほど触れた「自己同一性」も同様である。私のアイデンティティはかけがえないものだ。しかし、アイデンティティは万人が持つと想定されている。その意味では、万人の持つアイデンティティ群の中に、私のそれは埋没してしまう。認識とは本来、こうした矛盾とともに生成してくるものではなかったか。

矛盾を調停してくれるのは常に「対話（ダイアログ）」である。矛盾やグレイゾーンを受け入れず、どこまでも理詰めで行進する考えは「独語（モノログ）」でしかない。未成熟さに留まるということは、しばしばモノログに留まることを意味するだろう。それは何らかの創造的ケイキをもたらす場合もあるが、しばしば不安定さや病理に結実してしまう危険も抱え込む。

以上をふまえて僕はこう考えるに至った。大人とは、自分自身の抱えた矛盾と「対話」できる存在である。そうした対話を通じて、彼は意志的に「変化」してゆくことができる（子どもの変化は常に非意志的な「成長」として起こる）。それが「日本人にとっての大人」イメージに一致するかどうかはわからない。重要なことは、「大人」という言葉を価値観の伝達のために使わないことだ。

固定的な大人のイメージから離れて、動態としての「大人」について考えること。「a」と「b」は、そのためのキーワードとして、それなりに有効なものでありうると僕は考えている。

（斎藤環「日本人のイメージする大人」による）

（注） 1 ロールモデル——自分にとって行動や考え方の模範となる人物のこと。

2 トートロジー——同義語反復のこと。ある事柄について同義語または類語を反復させる修辭法。

3 共依存——特定の間関係に依存し、逃れられない状態に陥ること。

4 二重見当識——病的な意識障害の一種で、現実と非現実の境界線が分からなくなり、「現実の自分」と「非現実の自分」の両方の見当識（自分の状況を認識する力）が保たれている状態。

問

(A) 線部(イ)を漢字に改めよ。（ただし、楷書で記すこと）

(B) 線部(a)・(b)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C) 線部(1)について。筆者のいう「社会の成熟度と個人の成熟度は反比例する」とはどのような意味か。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 経済的な成長のために競争が進めば進むほど、堅実で我慢強くて他人に配慮できる大人の割合が減ること
- 2 生命科学が進歩し、寿命が長くなればなるほど人が大人になるまでの期間が延長されるということ
- 3 社会のなかで様々なことが自動化され機械化されればされるほど人は成熟するメリットがなくなり、それを選択しない若者が増えるということ

4 IT業界やゲーム業界が成長すればするほど未成熟さが積極的な価値を帯びるため、あえて若者に留まろうとする人々が増えるということ

5 社会が成長発展することによって豊かになればなるほど、大人になれない若者が増えるということ

(D) 線部(2)について。この状況を筆者はどのように評しているか。それを的確に表す言葉を本文中から抜き出し、五字以内で記せ。(ただし、句読点は含まない)

(E) 線部(3)について。ここにおける問いから導かれる「成熟」した大人の条件として最も重要視されることは何か。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 自己決定を免れるモラトリアム期間を終えて、親から独立して経済的に自立すること
- 2 自分自身の中に相反する認識を抱えつつも、アイデンティティが確立されていること
- 3 自分が「世界の中心」であると同時に、「世界の一部」でもあると認識できること
- 4 成長に伴った自尊感情を持ち、自分自身の言動に責任が取れること
- 5 他者への依存を防ぐために、自分の欲望を適切に抑制できること

(F) 空欄 a・b にはそれぞれどのような言葉を補ったらいいか。その組み合わせとして最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 a 受け取る b 伝える 2 a 待てる b 伝える
 3 a 対話 b 独語 4 a 中心 b 一部
 5 a 対話 b 変化

(G) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 若者が気になる異性にさりげなく好意を伝える態度は、その若者の成熟度の指標になる。

ロ コミュニケーションにおいて、「受け取るスキル」が高い人が「伝えるスキル」も高い、とは必ずしも言えない。

ハ 「独語」による成熟は、自分自身の抱えた矛盾を調停してくれるとともに、新たな創造の第一歩となる。

ニ 「待つ」ことは自分が「世界の一部」であることを認識することであり、「伝える」ことは「世界の中心」としての自分を尊重することである。

ホ 大人とは、自分自身の抱えた矛盾と「対話」し、そうした「対話」を通じて成長することができる存在である。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

ヨーロッパの中世世界では、もつとも精練された感覚、すぐれて知覚的な感覚、世界とのもつとも豊かな接触をうち立てる感覚とは、なにかといえ、それは聴覚であった。そこでは視覚は、触覚のあとに第三番目の位置を占めていたにすぎない。つまり五感の序列は、聴覚、触覚、そして視覚の順であった。ところが近代のはじめになって、そこに転倒が起こり、眼が知覚の最大の器官になった。見られるものの芸術であるバロックが、そのことをよく示している。では、中世世界ではなぜ聴覚が優位を占め、視覚が劣位におかれていたのであるうか。それは一方で、キリスト教会がその權威をことばという基盤の上においており、信仰とは聴くことであるとしていたからである。聴覚の優位は十六世紀においても、神学に保障されてまだ強かった。《神ノ言葉ヲ聴クコト、ソレガ信仰デアル》、《耳、耳だけが〈キリスト教徒〉の器官である》とルター(注1)も言っている。それだけではない。それとともに他方で、視覚は触覚の代理として官能の欲望に容易に結びつくものと考えられたからである。スペインの聖者ファン・デ・ラ・クルスの先駆者たちの一人は、自分の眼で見えるものをなんと五歩以内のものに限り、それを越えてはものを眺めてはならない、としていた。イメージにはなにか自然のままのもの、つまり規律的な道徳を破るところがあると考えられていたのであった。

ルネサンスの〈五感の階層秩序〉のなかで聴覚と視覚の位置が逆転し、視覚が優位化したことは、たしかに自然的な感性としての官能が解放されたことと結びついている。ところが、近代文明は、触覚と結びついたかたちでの視覚優位の方向では発展せずに、むしろ触覚と切りはなされたかたちでの視覚優位の方向で展開された。(2)近代文明にあつては、ものや自然との間に距離がとられ、視覚が優位に立つてそれらを対象化する方向を歩んだのである。近代透視画法の幾何学的遠近法や近代物理学の機械論的自然観、それに近代印刷術は、その方向の代表的な産物である。と同時に、その方向を強力に推しすすめたものであると言えらるう。そうしたなかで、時間も空間もすべて量的に計りうるものだと考えられるようになり、その結果、人間の時間も空間も宇宙論的な意味

を奪われ、非聖化された。また、遠近法にもとづく錯覚が利用されて、一般に視覚上或る一点が固定され、そこに収斂するように描き出されたものが眼に見える、秩序立った、永続的なものであるというもう一つの幻影がつくり出された。

たしかに視覚が優位に立った近代文明は、私たち人間に多くのものをもたらした。もしそのような近代文明がなかったならば、科学や技術の発達はこれほどにはならなかったであろうし、人間のための自然の利用もこれほどには達しなかったであろう。また、知識や思想の伝播もこれほどにはならなかったであろう。しかしながらその反面で、視覚が優位に立っただけでなく独走した近代文明は、見られるものを見るものから、知られるものを知るものから、対象を主体から引きはなしたのであった。そしてやがて、見られるものや知られるものはすべて物体化され、抽象化される一方、見るものや知るものは、そのように見られるものや知られるものを物体化し、支配せずにはおかない、冷やかなまなざしになったのである。《最大多数の最大幸福》というスローガンや快樂計算で知られる十八世紀末イギリスの哲学者ベンサムが案出した「一望監視施設」、つまり一望のもとに被管理者を見とおせるような建物、監獄などに眺め向きの建物が、最近あらためて人々の注目を浴びるようになった。この施設からも、見る、知ることが他の人間を支配する権力でありうるということがわかる。

⁽³⁾ 近代文明の視覚の独走、あるいは視覚の専制支配に対して、ずいぶんまえから多くの人々によって、いろいろなかたちで触覚の回復が要求されてきた。視覚の独走は、すでに述べたように、人間と自然、人間と人間との間に見られるものと見られるものとの冷やかな分裂、対立をもたらした。それに対して、人間と自然、人間と人間をそのような分裂や対立から救い出し、ふたたびそれらを結びつける力を持っているのは触覚だ、と考えられたのである。

たとえば、まさに近代文明の鋭い批判者ルソー^(注2)は、その『エミール』第二編のなかで、視覚の有能ではあるが誤りを犯しやすい点を問題にした。その上で、有能な感覚である視覚の欠点から免れるためにはどうしたらいいかと自問し、次のように答えている。そのために必要なのは、視覚を他の感覚、とくに反対の性格を持つ触覚に

従属させること、つまり、視覚の性急さを触覚の鈍重ではあるが確実な知識によって抑制することである。われわれはふつう、高さ、長さ、深さ、距離などを一目見ただけでは到底正確にとらえ知ることができない。けれどもそれは、一般に考えられているように感覚が判断を誤るのではなくて、むしろわれわれが感覚の用い方を誤っているためである。その証拠に、熟達した技師、測量師、建築家、石工、画家などを見るがいい。彼らはふだんから他の感覚、とくに触覚によって視覚を吟味し抑制している。だからこそ、一目見ただけでもわれわれよりも正確にそれをとらえるのである、と。しかもルソーは、(注3)アリストテレス的な意味での《共通感覚》の働きについてもはっきり着眼して、次のように述べている。

《共通感覚》sens commun が共通感覚と呼ばれるのは、それがすべての人間に共通な感覚だからではなく、それが《個々の諸感覚のよく規整された使用》から生まれるからである。また、諸感覚の伝える事物のあらゆる外観を相互に結びつけることによって、事物の本性をわれわれに教えてくれるからである。そしてこれは《第六感》とも呼ぶことができる。それは、五感に並ぶ第六のものとして特別な感覚を持ったものではなく、諸感覚の結合のうちに働くその働きは脳のうちにのみ存するのである、と。

まえの方のルソーのことはのなかに画家や建築家が出てきている。ところで、《視覚芸術》と呼ばれてきた絵画のなかでも、とくにセザンヌ(注4)以後、触覚の回復が自覚され、めざされるようになった。コリングウッドも言うように近代世界のなかで、それまで画家とは、第一義的に眼を使う人であり、眼が明らかにしたものを記録するためにだけ手を使う人だと見なされてきた。《そこへセザンヌがやってきて、あたかも盲目の人のように描くことをはじめた。彼の天才のなんたるかをよく示している静物画のデッサンは、あたかも両の手で探りまわされた物体のようである。》(注5)室内画についても同様で、それを見るものは

美術史の観点からすれば、一般にセザンヌは絵画の自律性を求め、印象派が伝統的な絵画技法を否定したのち、その印象派をこえて絵画の新しい独創的な論理、つまり視点の多様化、フォルムの単純化、そして(注6)デフォルマシオンに到達した人として知られている。また《自然を円筒や円錐や球体として把握すること》と語って二十世紀

の立体派キュビスム(ピカソやブラックなど)に先駆けた人として考えられている。そのような通念からすれば、右に引いたコリングウッドのことは、あるいは極端で乱暴なものに聞こえるかも知れない。けれども、いま述べたセザンヌの手法に見られる《印象派のタッチと全く異なるセザンヌ独自の総合的なタッチ》とは、そういう運動(1)する触覚にもとづいていると言えるのではないだろうか。また、立体派をはじめとする二十世紀のいわゆる《抽象絵画》にしても、ふつう考えられているよりもはるかに大きく触覚的なものの重視の上に成り立っているのではないだろうか。

近代世界での視覚の独走と専制支配に対して、このように触覚やまた聴覚の回復をはかること、その方向で五感の組み換えを行なうことはたしかに必要である。

(中村雄二郎『共通感覚論』による)

(注) 1 ルター——ドイツの宗教改革者(一四八三—一五四六)。

2 ルソー——フランス啓蒙期の思想家(一七二一—一七七八)。

3 アリストテレス——古代ギリシアの哲学者(前三八四—前三二二)。

4 セザンヌ——フランスの画家(一八三九—一九〇六)。

5 コリングウッド——イギリスの哲学者、歴史家(一八八九—一九四三)。

6 デフォルマシオン——「形をゆがめたり、不恰好にすること」を意味するフランス語で、芸術表現の一種を表す。

問

(A) 線部(a)と(c)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(B) 線部(1)について、この問いに対する答えとして最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号

で答えよ。

- 1 キリスト教会がその權威を基盤として、五感の序列というものを定めていたから。
- 2 視覚を通して生まれるイメージは官能的なものと結びつきやすいと考えられていたから。
- 3 聴覚を通じた働きかけによってこそ、人間は信仰へと導かれると考えられていたから。
- 4 聴覚は視覚に比べて、官能の欲望に屈することが少ないと考えられていたから。
- 5 聴覚はすべての感覚の中で、キリスト教神学の形成に最も役立つと考えられていたから。

(C) 線部(2)について。「視覚が優位化した」結果、どのような状況が生じたか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 自然というものを初めて秩序立った永続的な枠組みの中で捉えるようになった。
- 2 宇宙の中での人間と自然との関係を考慮することを、人間は忘れるようになった。
- 3 見るものと見られるものとを媒介する情報を、視覚を通してのみ得るようになった。
- 4 キリスト教会はその權威を、視覚によって得られるイメージの上に築くようになった。
- 5 人間は見られるものから引き離され、人間と自然を支配する力を獲得するに至った。

(D) 線部(3)について。その理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 視覚よりも触覚は、対象が空間の中で持つ量的な意味を具体的に把握するのに長けているから。
- 2 人間がもつ時間と空間にふたたび宇宙論的な意味を取り戻し、聖化する必要があるから。
- 3 視覚が与える情報の速度と、触覚が与える情報の速度を合わせた方が、より素早く対象を認識できるから。
- 4 主体と対象との関係を構築し直し、より効率的に自然を利用する可能性を開く必要があるから。
- 5 諸感覚の間にあるバランスを組み換えて、人間とその世界との関係を構築し直す必要があるから。

(E) 空欄 にはどのような表現を補ったらいいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 自分が室内で呆然と立ち尽くしているのを感じる。ものたちの騒々しいざわめきに戦きながらも耳を傾けようとしていると感じる。

2 自分が室内の光の渦の中を泳ぎ回っているように感じる。花瓶の鈍色の輝きがすべらかに語られた言葉のように変化するのを感じる。

3 自分が室内でたどたどしくたたずんでいるように感じる。唐突に現れた壁にふと触れて、たたえられた陽光の暖かみを覚えて安堵するように感じる。

4 自分が室内をぶつかって歩いてるように感じる。いかにも威張った感じの角ばったテーブルのまわりを用心深く廻っているように感じる。

5 自分が室内で異次元に迷い込んだように感じる。ひとり歩いてきた椅子と出遭い、握手を交わして挨拶をするのが不思議ではないように感じる。

(F) ——線部(4)について。「運動する触覚」がとらえようとしたものは何か。本文中にある最も適切な語句を五文字以内で抜き出して記せ。

(G) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ ヨーロッパの中世世界からルネサンスにかけて生じた、諸感覚におけるバランスは、聴覚、触覚、視覚の序列から、視覚、聴覚、触覚の序列へと変化したといえる。

ロ 視覚の優位は、対象としての世界を量的にかつ物体化して把握するのを可能にし、その結果、見られる側の主体を支配する力をも、見る側の主体に与えるようになった。

ハ ルネサンス的視覚文化からの脱却の試みとして、触覚の意義の回復が必要である。五感の間に新しいバランスをもたらすためには、「共通感覚」という、統合された新しい感官の育成が求められる。

ニ セザンヌの試みには、単なる絵画表現の刷新ではなく、人間が自然に対してもつ新しい関係の探究という側面があった。

ホ 「共通感覚」によつて意図されているのは、五感の単なる協調や組み換えではなく、人間と自然、人間と人間とのより豊かな関係の構築であり、そのためには五感における触覚の地位回復が求められる。

三 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

近き頃、奥州にある山寺の別当(注1)なりける僧、本尊(注2)を造立せんと年ごろ思ひ企て、金五十両、守り袋に入れ、首にかけて上洛(注3)しける程に、駿河の國、原中(注4)の宿にて、昼、水浴みける所に、この袋を忘れて、次の日の夕方、思ひ出したりけり。口惜しく、あさましかりけれども力及ばず。「今は人の物にぞなりぬらん。帰りて尋ぬともあらじ」と思ひ、上洛して、空しく下向(注5)せんもほいなく覚えて、形のごとく本尊を造り奉りて下りける。

さて、原中の宿にて、下人(注6)に、「この家とこそ覚ゆれ」など言ひて、見入れて通りけるを、家の中より、若き女人ありて、「何事を仰せらるるぞ」と言ふ。「上りの時、物を忘れたりしが、この御宿(注7)と覚え候ふことを申すなり」と言ふ。「何を御忘れ候ひけるぞ」と問ふ。その時、あやしくて馬より下り、「しかじかの願を起こして、金五十両入れて候ふ守り袋を忘れたり」と、ありのままに委しく語れば、この女人、「わらはこそ、見つけて候へ」とて、したためしままで取り出で、取らせければ、あまりのことにて、あさましくこそ覚えけれ。さて、「これは失せたる物にてこそ候へ。十両は女房(注8)に参らせん」と言へば、「欲しくは、五十両ながらこそ引き籠め候はめ。仏の御物なり。いかに少しも給はるべきか」と言ひければ、なかなかとかくの子細に及ばず。

「下りの時、よくよく申すべき旨あり」とて、やがて上洛して、本尊思ふごとく造立して、下りさまに、この女人を訪ねて、「そもそも、いかなる人にておはするぞ。いかやうなる事をして過ぎさせ給ふぞ」などと、こまやかに語らひ聞きければ、「京の者にて侍るが、親しき者もみな失せて、縁につれて下りて侍るが、あからさまに思ひし程に、この宿に一兩年住み侍り」と言ふ。「さては、いづくも同じ御旅にこそ。いざさせ給へ。小所領(注9)など知行する身なれば、世間後見て給へ」と言へば、「承りぬ」とて、やがて具せられて下りて、世間後見て、楽しく心安く、当時までありと聞こゆ。

上古には、かかるためしもあり。当世には、まめやかにありがたき、正直の賢人なり。文永年中の事なれば、むげに近き事なり。たしかに聞き伝へて、ある人語り侍りしが、随喜の心せちにして、かかるためし、人にもあ

まなく聞かせ、世の末までも言ひ伝えて、人の心のまがれるを引き直す道とせんと思ひて、この物語に書き置き待る志、ただこれによりてなん、思ひ始め待るなり。

〔沙石集〕による

(注) 1 別当——住職。

2 本尊——寺院の本堂に安置される中心的な仏像。

3 上落——上京。

4 原中の宿——現在の沼津市にあった宿駅。

5 知行する——領地を治める。

6 世間——暮らし。財産。

7 後見て——世話をして。助けて。

8 文永年中——西暦一二六四年—一二七五年にあたる。

問

(A) 線部の文法的な説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 「なり」は断定の助動詞、「ぬ」は打消の助動詞、「らん」は婉曲の助動詞
- 2 「なり」は断定の助動詞、「ぬら」は完了の助動詞、「ん」は推量の助動詞
- 3 「なり」は推定の助動詞、「ぬ」は完了の助動詞、「らん」は推量の助動詞
- 4 「なり」は推定の助動詞、「ぬら」は完了の助動詞、「ん」は推量の助動詞
- 5 「なり」は動詞、「ぬ」は完了の助動詞、「らん」は推量の助動詞
- 6 「なり」は動詞、「ぬ」は打消の助動詞、「らん」は婉曲の助動詞

(B) 線部(イ)は、それぞれ誰の行為・状態か。左記各項の中から最も適当なもの一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

- 1 作者
- 2 別当なりける僧
- 3 下人
- 4 若き女人
- 5 ある人

(C) 線部(1)と同一人物を指す自称(一人称)代名詞を、本文中から三字以内で抜き出せ。

(D) 線部(2)の具体的な内容を示す記述を、本文中から八字以内で抜き出せ。ただし句読点は含まない。

(E) 線部(3)の現代語訳を七字以内で記せ。ただし句読点は含まない。

(F) 線部(4)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 少しはお金を分けていただいてもよいでしょうか
- 2 少しであっても御礼を頂戴するわけにはいきません
- 3 少しでも人をお助けできればと思っております
- 4 少なからず仏様の罰を受けるのではないのでしょうか
- 5 少しは仏様からご利益をいただけるかもしれません

(G) 線部(5)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 ずうずうしいと思ったが
- 2 恥ずかしいと感じていたが
- 3 気の進まない旅だったが
- 4 短い間のつもりだったが
- 5 急に思い立ったことだったが

(H) 線部(6)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 私と一緒にいらっしやませ
- 2 あなたの旅に同行させてください
- 3 ここに私を住ませてください
- 4 あなたの身を守らせてください
- 5 私をあなたの弟子にしてください

(I) 線部(7)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 まれで
- 2 本当に
- 3 なかなか
- 4 すばらしく
- 5 尊くて

(J) 線部(8)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 まったく
- 2 確かに
- 3 意外に
- 4 あまりに
- 5 いっそう

(K) ——— 線部(9)について。誰がどのように思い始めたのか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 別当の僧が、人々のためにいつそう仏道修行に打ち込もうと思い始めた。
- 2 世間の人々が、よくない心を捨てて正直に生きていくべきだと思い始めた。
- 3 女人が、まじめに生きることによって人々の手本になろうと思い始めた。
- 4 作者が、人のためになる貴重な逸話を書き残していこうと思い始めた。
- 5 ある人が、さまざまな話を人に語り伝えることを意義深いと思い始めた。

【以下余白】

